

Sanctuary と南部の悪について

仁 木 勝 治

作者の口から直接創作の本意を耳にすることをゆるさ
れていない読者にとって、*Sanctuary* ほどその文学的価
値をまどわせる種となった作品もまためずらしい。その
戸惑いは、Faulkner によるこの作品の創作過程を全く
知らされておらず、また、知らされる必要もない一般読
者が1932年に出版されたモダン・ライブラリー版の序文
を読んだ時から始まる。なぜならば、Faulkner はその
序文の中で、極めて一般読者から誤解されやすい言葉を
口にしてしているからである。

To me it is a cheap idea, because it was de-
liberately conceived to make money.⁽¹⁾

わたしには、それは安っぽい思いつきによるもの
だ。なぜなら、それは金もうけのために故意に考えら
れたものだからである。

この「安っぽい思いつき」という言葉が、Faulkner
に大きな期待を寄せる読者に深い疑念をいだかせたので
ある。それだけではない。更に読者の気持を殺いだのは
「金もうけを意識して」と述べたからであろう。彼の第
一作目の小説、*Soldiers' Pay* の売れゆきが約2500部、第
二作目の *Mosquitoes* が約1200部だったという事情から
みれば、確かに Faulkner の作品は、*Sanctuary* を書き
始めた頃は、読者層がそれほど厚かったとは言えない。
従って、この作品は、はじめはそのような意図のもとに
書かれたのかも知れない。*Sanctuary* の最初の草稿が
Harrison Smith の経営する出版社、Jonathan Cape
and Harrison Smith 社に送られたのは1929年5月のこ
とであった。ところが、実際にこの作品が日の目をみた
のは1931年2月のことである。出版が遅れた理由は、例
の序文で述べているように、Faulkner が「自分として
想像し得る限りの恐ろしい物語を考え出し」(invented
the most horrific tale I could imagine⁽²⁾)、そこには
女子大生 Temple が、性的不能者 Popeye のためにト
ウモロコシの穂軸で犯され、殺人やリンチがおこなわれ

るといった、異常な事件が取り扱われていたためであ
る。Smith はこのような「恐ろしい」作品を出版するこ
とは到底出来ないと考え、しばらくの間、自分のところ
にあたためておいたのである。1930年11月に、最初のゲ
ラをうけとった Faulkner は、すでに出版している *The
Sound and the Fury* や *As I Lay Dying* をはずかし
めないためにも、かなりの範囲にわたって書き改めるこ
とにし、それはうまくいったと、次のようにのべてい
る。

... trying to make out of it something which
would not shame *The Sound and the Fury* and
As I Lay Dying too much and I made a fair job
...⁽³⁾

『響きと怒り』や『死の床に横たわりて』をあまり
辱めないようなものをここからうみ出すようにし、そ
の仕事はうまくいった。

それで、1931年に世に出た *Sanctuary* は、作者自身、
Faulkner at Nagano の中でも「書き改めるときには出
来るだけのことをした」(At that time I had done
the the best I could with it⁽⁴⁾) といっているように、
三年前に書かれた「安っぽい」、「恐ろしい」物語とはか
なり異ったものとなった。この作品の概要をながめてみ
よう。

物語は、Horace Benbow が結婚後10年にして夫婦生
活にいや気をさし、妻のもとから別れて、キンストンか
らジェファソンの実家に戻る途中から始まる。オール
ド・フレンチマンズ・プレイスの近くにある泉のところ
で彼は Popeye に呼びとめられる。Popeye は酒密売者
Lee Goodwin のところに一時的に住みついているギャ
ングの一味である。それから4日後に Temple Drake が
酒に酔っぱらった Gowan Stevens につれられて車でオ
ールド・フレンチマンズ・プレイスにやってくる。車の
故障により Temple はそこに滞在することになるのだ

が、そこでの彼女の振舞は、男たちに威されつつも、むしろ挑発的だと言えよう。彼女は Ruby Goodwin が日の暮れないうちにその場を立ち去るようにと気を配ってくれるにもかかわらず、結局、このオールド・フレンチマンズ・プレイスの納屋でその夜を過ごすことになる。翌朝、低能な Tommy に見張りをさせて彼女がトゥモロコシをしまう倉庫にかくれている間に、そこへ頭上のはね上げ戸から Popeye がはいってくる。性的不能者 Popeye は Tommy を射殺したあと、おびえて抵抗もせずにあふえている Temple をトゥモロコシの穂軸で強姦し、彼女を車に乗せてメンフィスの淫売屋につれていく。Lee Goodwin が Tommy 殺しの容疑で刑務所に入れられる。そこで Horace は正義のために Goodwin の弁護をしようと決意する。Horace は Goodwin の内妻 Ruby を自分の持ち家に住まわせるが、やがて妹 Narcissa から反対され、彼女をホテルに移す。Popeye を恐れる Goodwin は、ただ自分の無実を主張するばかりだ。ホテルに移された Ruby は Narcissa によって代表されるような町の婦人連によってホテルからも追い出される。いよいよ Tommy 殺しの裁判の証人台に Temple が立たされるが、そこで彼女は Goodwin が強姦し、Tommy を射ったのだと偽証する。腹を立てた市民は Goodwin をリンチにかけ、焼き打ちにしてしまう。かくして Horace の努力は無に帰し、正義もやぶれるのだ。

一方、Temple をメンフィスに連れてきた Popeye はそこで自分の代りに Red を Temple と関係させる。やがて彼女の方から積極的に Red の肉体を求めるようになる。今度は、Popeye は Red を射殺してしまう。この Red 殺しのあった晩、アラバマの小さな町で警官殺しがあり、Popeye はその容疑で、パーミングムで逮捕される。

Faulkner がゲラの出来た段階で書き加えたと言われている最終章では、Popeye の生い立ちと死刑までの独房での最後の様子、それにリュクサンブールの公園のなかを歩いている Temple と父親の様子が描かれている。

The Wild Palms の二つの物語を別々に離して発表することを平気でゆるしておく Faulkner の態度から考えるならば、われわれは彼の「安っぽい思いつき」とか「金もうけのため」といったような言葉をどこまで素直にうけとめてよいか疑問である。当の Faulkner は初校のゲラをみて「それからわたしは、これはとてもひどい作品だとわかったので……」(Then I saw that it was

so terrible that⁽⁵⁾……) といっており、確かに、ここには、性的不能者 Popeye が女子大生 Temple をトゥモロコシの穂軸で強姦したり、Tommy を殺害したり、Temple をメンフィスの淫売屋につれてゆき、自分の目の前で彼女を Red と関係せさ、あげくの果てに Red を射殺するという、暴力に満ちた異常性、また、Goodwin が不正な判決により有罪を宣告され、リンチにあり様や、葬式の際に Red の死体が棺桶からころげ落ちる様、等々、一般読者には想像もつかないような暴力に満ちた残酷性、異常性がひそんでいる。だが、Faulkner が本当に「ひどい」と思ったのは、単に今のべたようなセンセーショナルな面についてだけではなかったのである。その証拠に、今のべたような場面は依然としてそのまま作品の中に取り入れられていることからわかる。⁽⁶⁾むしろ、Faulkner が書き改めようと考えたのはもっと別のところ、つまり、最終章のつけたしなどにあったのではなかろうか。それが『響きと怒り』や『死の床に横たわりて』をあまりはずかしめないように努力した」結果であり、「うまくいった」理由でもあったのだ。

Sanctuary は極めてセンセーショナルな事件が扱われていたために当時の出版社、モダン・ライブラリー社からその出版に当って二の足を踏まれた、いわゆる、醜悪の文学である。この作品も、*The Sound and the Fury* をはじめとして、その他の多くの作品によって代表される南部社会における没落と現代社会の頹廃を扱った Faulkner の注目すべき作品の一つだといえよう。南部社会の没落は、Popeye の両親から受け継いだ運命の中にみいだされるし、現代社会の頹廃は悪に正義の滅ぼされる Horace の中にみいだされる。Horace の善に対して Temple の悪が、ここでは道義的に、あるいは、法的に善悪の二元論をつくりあげている。なるほど、Popeye は極悪非道な人間にちがいない。しかし、彼の悪は両親によってうえつけられ、Temple によって開花する。Popeye は、いわば、呪われた現代社会の犠牲者だといえよう。こういった点を中心に、以下、論をすすめていくことにする。

われわれは、確かに最終章での Faulkner の説明によって、Popeye を遺伝と環境に運命づけられた人物として自然主義の立場から規定することが出来る。二度と戻ってくるあてのない、性病持ちのスト破りを職業にしている父親からクリスマス・カードが着いた当日、Popeye は生まれたのであるが、その体質は極めて虚弱で、四歳ぐらゐまで歩くことも、しゃべることも出来ず、生まれた当初は盲目でないかとさえ思われた。更に、彼の

子供のころの身体の状況は、

He had no hair at all until he was five years old, by which time he was already a kind of day pupil at an institution: an undersized, weak child with a stomach so delicate that the slightest deviation from a strict regimen fixed for him by the doctor would throw him into convulsions.⁽⁷⁾

彼は五歳になるまで全然髪の毛は生えず、そのころには、すでにある施設の通学生のようなものになっていた。小柄で、弱く、とてもおなかをこわしやすい子供だったので、医者に決められた厳しい摂生を少しでも破るようなことがあれば、ひきつけを起こしたものだ。

と説明されている。彼は、医学的にもそれほど長生きのできる身体ではなく、アルコールなどは一切だめだと言われている。われわれは、Temple を異常な手段で強姦し、殺人を犯す Popeye を悪名高い非道徳者とみることは容易であるが、一方では、Faulkner が必らずしも心底からの悪人として描いている訳けではないという点をもみいだすことが出来る。しばしば述べられている、「毎夏ポパイは母親にあいに出かけた」(Each summer Popeye went to see his mother⁽⁸⁾)という言葉が、母親に心配をかけまいとする Popeye の心優しさの一面をのぞかせている。この心優しさをもった悪人 Popeye は、自分が犯しもしない殺人罪で死刑に処せられることによって一抹の憐憫を讀者から寄せられることにもなる。Popeye は、正に機械産業文明に毒された南部社会の犠牲者というほかはない。

この最終章によって Popeye の存在が大きな意味をもつのは、運命にとらわれた人物としてであろう。Popeye の運命は、南北戦争以来たどってきた南部全体の運命そのものの具現なのだ。Popeye は確かに悪人である。しかし、それは過去の不正な行為によって蓄積された歴史の重荷に喘いでいる南部に巣くう悪そのものの化身としての悪人なのだ。

Faulkner が創造した Yoknapatawpha をもとにして考えるならば、南部は、過去の罪科によって悪にみまわれている。この南部の現在の悪とは一体、何なのか。それは *Absalom, Absalom!* の中で Shreve に Quentin が語る祖先たちの犯してきた数々の悪事の積み重ねのうえにうち建てられた現在の腐敗しきった南部の状況である。Popeye は、この過去の悪にみまわれた南部の現代

悪そのものを象徴する人物である。なぜならば、現在の南部の状況が過去の罪科のうえにうち建てられているように、Popeye もまた、両親の肉体的、精神的欠陥を受け継いでこの世に生まれてきたのであるから。

機械化の浸透しつくした南部ではもはや個々の人間の尊厳が喪失し、南部社会全体が麻痺した、いわゆる、インポテントな状況におちいつてしまっていることを Faulkner は Popeye の姿と行動の中に投影させようとした。性的不能者 Popeye は、そういった南部社会の現代主義そのものの化身ともいえる存在で、その眼は、

... looked like rubber knobs, like they'd give to the touch and their recover with the whorled smudge of the thumb on them.⁽⁹⁾

ゴムの小さな塊のようで、さわるとへこみ、また、親指の指紋をつけてふくらんでくるようにみえた。

Popeye が生きることの意味をすっかり奪い去られた状態でこの世に生まれてきたことは、生命を失ったようなこの眼にも象徴されているし、また、彼が犯しもしなかった別の殺人の容疑で処刑される際の、あの牧師のすすめるお祈りも無視し、ベッドに寝ころんでタバコをふかす態度にも表われている。

'Will you let me pray with you?' he said. 'Sure,' Popeye said; 'go ahead. Don't mind me.' The minister knelt beside the cot where Popeye lay smoking.⁽¹⁰⁾

「きみと一緒に祈りさせてくれるかい？」と彼は言った。「おれのことなんか気にしねえで、さっさとやれよ」牧師は、ポパイが横になってタバコをふかしているベッドのわきでひざまずいた。

この Popeye によって Temple が強姦される場所、オールド・フレンチマンズ・プレスは、西洋杉の木立のなかから無気味に突き出た、南北戦争前に建てられた廃墟なのだ。この建物の姿は、Popeye の運命そのものを表わしていると同時に、Faulkner の多くの作品のテーマとして用いられた、南北戦争以後、没落してゆく南部貴族社会を象徴的に表わしているともいえる。

Tommy を殺し、Red を殺すインポテントな Popeye は道義的にも法的にも許されるべきものではない。従って、彼が死刑というむくいによって社会的制裁をうけるのも当然のことである。だが、悪人とは言え、Popeye

の悪行の根源は、彼自身の心の奥にひそんでいるというよりもむしろ、生まれた時にすでに背負っていた運命的なものの中にあり、それが Temple の誘惑によっていよいよ現代悪そのものを呈するにまで至ったのだ。つまり、Faulkner は悪の本質を Popeye の悪の根源となっている Temple にみいだしているわけである。

もし、Temple が Lee Goodwin の家から本当に逃げ出したかったならば、どうして彼女は逃げ出さなかったのだろうか。そのチャンスはいくらでもあったはずである。また、Temple はメンフィスの淫売屋へ連れて行かれる際にも、ガソリン・スタンドのところで逃げ出すチャンスをいくらでもみいだせたはずである。それにもかかわらず、彼女は Popeye のもとから決して逃げ出そうとしなかった。更に、Temple は、夜こっそりメンフィスの宿から抜け出して Red に密会しようとして Popeye につかまってしまう、一緒にグロットーに行くのはめになるのだが、その途中、Temple は、

‘He’s a better man than you are!’ Temple said shrilly. ‘You’re not even a man! He knows it. Who does know it if he don’t?’ The car was in motion. She began to shriek at him. ‘You, a man, a bold bad man, when you can’t even—When you had to bring a real man in to—And you hanging over the bed, moaning and slobbering like a—You couldn’t fool me but once, could you? No wonder I fled and bluh.’⁽¹¹⁾

「彼はあんたなんかよりいい男だわ!」とテンブルが金切り声で言った。「あなたは男でさえないんですもの! 彼はあのかを知っているわ。彼が知らなければ誰が知っていると言うの?」車は動いた。彼女は彼にわめきはじめた。あんた、男でしょう、ずぶとい男だわ、出来もしないのに——本当の男を連れて来なくちゃならなかったのに、——それであんたはベッドの上に身体をのりだしたり、呻いたり、よだれをたらしたりなどをして——あんたは一度しかわたしを辱めることが出来ないわ、わたしが血を出したのも不思議じゃないわ、そして血が——」

とあって、Popeye に挑発の言葉をあびせかける。このように、Popeye の悪への道は、Temple が原因になってひき起こされているといっても決して過言ではない。

確かに、この物語の一つのテーマは、現代の南部社会に巣くう悪と正義の戦いである。Ruby は Temple に

向って、表面的に飾られた上流社会に住む人間の奥にひそむ、墮落した状況を皮肉っぽく次のようにのべる。

‘Oh, I know your sort,’ the woman said. ‘Honest women. Too good to have anything to do with common people. You’ll slip out at night with the kids, but just let a man come along.’ She turned the meat. ‘Take all you can get, and give nothing. “I’m a pure girl; I don’t do that.”⁽¹²⁾

「あゝ、わたしにゃ、あんたのようなやり方を知ってるさ」と女が言った。「あまり上品すぎて、そこらそんじょの人間とは何も出来ないっていうやり方をね。あんたは若い連中とは夜に抜け出しもするけど、いや一人前の男を来させてみなよ」彼女は肉をひっくりかえした。「手にいれられるものは何でも手にいれて、ひとには何も与えないんだから。それで『わたし、純潔な娘よ、そんなことしないわ』っていうのさ」

判事を職業としている父親の上流社会に住み、エリート・コースを歩む大学生 Temple と、酒密売者の内縁の妻 Ruby Goodwin の間にみいだされる対照は、Horace と悪との対決の中に象徴的に表わされているといえよう。

過去の運命を背負った南部の歴史を具現する Popeye、失われた世代を代表する一つのタイプ、*Soldiers' Pay* 中の Cecily のような、フラッパーという言葉のぴったりする Temple、また、表面の体載をととのえるためには平気で嘘をもつく Narcissa、こういった連中によって創りあげられた現代の南部社会、特に、ジェファソンは、もはや、並の力ではどうにも手のほどこしようがないほど混乱の底に陥っている。この社会の中で正義のために戦う者には、力強い勇気と意志がなければならない。そういう意味では、Horace の悪との戦いはあまりにも無力なものであった。正義のために戦う Horace の努力も、結局は、Lee の人間的な弱さの前にうちくだかれてしまわざるを得ない。Lee のこの弱さは、Popeye をおそれて Tommy 殺しの真相をどうしても法廷で告白しようとしないうちに明確に表われている。こういった点を重視して考えるならば、Faulkner が「相像しうる限りの悪も恐ろしい物語」といった意味は、悪そのものよりも、秩序や正義が人間的弱さによって崩壊し、否定されるところにある。ジェファソンの町は、Lee

Goodwin の意志の弱さと Temple の偽証によって法の力も及ばぬ、犯罪者たちの逃げこむ「隠れ家」で、極めてアイロニカルな、あるいは、パラドクシカルな意味で「聖域」となっているのである。

Horace の、あるいは作者の、悪のひそむ現代南部社会への批判、あるいは挑戦は、極端なピューリタン社会への Hawthorne の批判のように極めて深刻なものであった。あまりにも厳格すぎた植民地時代のピューリタン社会への批判とでは、これまたあまりにも対照的ではあるが、ともに真のリベラリズムを求めたという点では共通しているといえるだろう。最後に敗北するとは言え、Horace の多くの犠牲を払った悪との戦いにはリベラリズムを求める、強い人間的な意志が働いている。それは丁度、*The Bear* 中の Ike がすべての土地をすてて求めるリベラリズムにも相通じるもので、そこでは、*The Scarlet Letter* 中の Hester の求めるリベラリズムと共通する点もみいだされる。

Faulkner は、Horace の求める正義が破られたあと、リュクサンブールの公園を歩く Temple と父親に皮肉な眼度しをなげかけ、過去の罪科を背負い、更に現代社会に深く根差すこととなった悪の根源を、この判事という上流社会に生きる人間を父に持つ Temple にみい

だしているのである。

Notes

- (1) *William Faulkner: Essays, Speeches and Public Letters*, edited by James B. Meriwether (Chatto & Windus, London, 1967), p. 176.
- (2) *Ibid.*, p. 177.
- (3) *Ibid.*, p. 178.
- (4) *Faulkner at Nagano*, edited by Robert A. Jelliffe (Tokyo, Kenkyusha LTD., 1966), p. 65.
- (5) *William Faulkner: Essays, Speeches and Public Letters*, p. 178.
- (6) *Sanctuary* がゲラの段階で修正されたことについては、C. Brooks や E. Volpe なども指摘しているように Linton Massey の “Notes on the Unrevised Galleys of Faulkner’s *Sanctuary*,” *Studies in Bibliography* (Papers of the Bibliographical Society of the University of Virginia), 8 (1956), p.p. 195-208, に詳しい。
- (7) *Sanctuary* by William Faulkner (Penguin Books, 1977), p. 246.
- (8) *Ibid.*, p. 241.
- (9) *Ibid.*, p. 7.
- (10) *Ibid.*, p. 251.
- (11) *Ibid.*, pp. 184-5.
- (12) *Ibid.*, p. 47.